

通信制高等学校サポート校における登校安定までの心理的変容過程

山田 耕一¹ 田村 節子²

本研究の目的は、中学生時代に不登校を経験した生徒が、通信制高等学校サポート校（以下、サポート校）において登校を安定させるまでの心理的変容過程のモデルを生成するとともに、サポート校の何が登校を安定させているのかについて、生徒たちの視点から明らかにすることである。調査対象校は、調査研究者が大学院修士課程の外部実習を行っていたサポート校で、一般的な全日制高等学校に近い学校文化を有している。高校3年生全員を対象に面接を実施して、中学生時代に不登校を経験して現在は登校が安定している生徒9名を半構造化面接の対象者として抽出した。この生徒に対して半構造化面接を実施し、不登校時の状態、このサポート校を選んだ理由、入学前後の気持ちの変化と理由、登校安定の理由などをインタビューした。この面接のテキストデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析し、23個の概念を生成した。この概念から12個のカテゴリーを見出し、12個のカテゴリーはさらに8個の上位カテゴリーにまとめられた。その結果、不登校状態から登校が安定する過程において生徒自身の内的な成長を示す部分とそれを支える3つの上位カテゴリーが明らかとなった。すなわち、生徒自身の内的な成長は、青年期の発達課題である自己同一性（アイデンティティ）の確立につながるものであり、その成長を支える3つの要素は、安心できる居場所（学校や家庭など）、登校意欲を維持するもの（友人、生徒同士の助け合う仕組み、学費負担）、適度な距離感のある先生のサポートであることが明らかとなった。さらに保護者と教職員の視点からも考察を加えた。

キーワード：不登校、通信制高校、サポート校、登校安定、M-GTA

問題と目的

通信制高等学校は、1961年の学校教育法一部改正により全日制・定時制につぐ第3番目の課程として誕生した（尾場, 2011）。これは、就業等のために全日制高等学校に進学できない青年に後期中等教育の機会を提供するものとして制度化された（文部科学省, 2013）。

しかし、近年では勤労青年の割合は減少しているにもかかわらず、学校数、生徒数が増加している。これは、スクーリング以外は通学する必要がないこと、ほとんどが単位制、2学期制となっていることなどから、転・編入学等柔軟な対応がしやすいことによる。このため、全日制課程からの進路変更等に伴う転入学・編入学者（中途退学経験者）、中学校までの不登校経験者など自立に困難を抱える者、過去に高等学校教育を受ける機会がなかった者など、様々な入学動機や学習歴をもつ者が多くなっている（文部科学省, 2013）。

ところが、月数回しか登校が義務づけられていない通信制高等学校のシステムは、生徒たちには魅力的に映るが、独力では、3年間で卒業どころか学習についていくことや友人関係を構築することが難しいのが現

実である。そのため、「通信制高等学校に在籍する生徒が3年間で高校を卒業できるように支援する民間の教育機関」として、1990年代前半にサポート校が現れた（遠藤, 2002）。学びリンク株式会社（2015）によると、サポート校は、通信制高等学校の単位認定に必要なレポート作成等について生徒のサポートをするとともに、毎日通える環境づくり、受験指導、芸術等の専門コース設置等の特徴を有し、学習面・生活面・心理面についてもサポートするところが多い。生徒は、通信制高等学校とサポート校の両方に在籍している状態で、普段はサポート校に通学している。高校卒業の資格は通信制高等学校によって与えられる（Figure 1）。

内田（2013）によると、サポート校は、不登校を経験した生徒や高校を中退した生徒の受け皿として社会的に認知され、需要が伸び、2000年代前半から急激に校数が増加した（Figure 2）。

サポート校が急増した理由として、サポート校に入学することによって通信制高等学校の卒業がより確実になることと、中学生時代に不登校を経験した生徒など、既存の学校に適応するのが難しい生徒が安定して登校できるようになり、卒業後、進学や就職をしていることが多いということがあげられる。

遠藤（2002）によれば、サポート校は民間の教育機関であり法的な規制もないため、通信制高等学校へ

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

提出するレポートの作成支援のみを行うものから、レポート以外の学習支援や生徒の生活指導までを含めて既存の高校と同様に行事を行うものまで、さまざまなタイプが存在する。そこで、遠藤（2002）は、質問紙調査によってサポート校を含む周辺の教育施設（高等専修学校、技能連携施設等）の「学校文化」を明らかにした。その結果、「学校文化」項目の採用の種類や程度に大きな幅が存在することが明らかとなった。また、東村（2004）は、あるサポート校を対象としたフィールドワークによって生徒への支援方法について調べ、教師と生徒が親密な関係にあること、学習よりも生徒が学校を楽しんでいることが重視されていること、教師が生徒一人一人に合わせた丁寧な対応を行っていることという3つの特徴を明らかにした。ほかにも、サポート校生徒に対するアンケート調査を行いメンタルヘルスの状態を明らかにした研究（齋藤・松岡・黒沢・森・栗田，2005）などが取り組まれている。しかし、生徒たちの視点から、サポート校において登校が安定する心理的変容過程やサポート校の何が登校を安定させているのかを明らかにした研究は見られない。

本研究では、中学生時代に不登校を経験した生徒が

サポート校において登校を安定させるまでの心理的変容過程のモデルを生成するとともに、サポート校の何が登校を安定させているのかについて、生徒たちの視点から明らかにすることを目的とする。

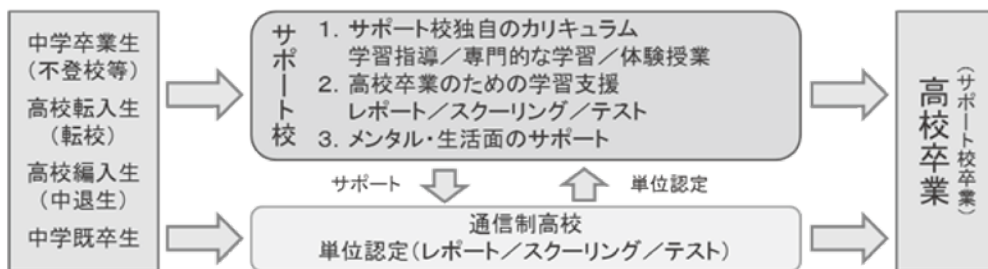
方 法

調査対象校

概要 調査対象としたのは、関東圏中核都市住宅地内にあるA通信制高等学校サポート校（技能連携校）で、生徒数約80名、教職員約15名（うち常勤8名）の小規模校である。教育理念として「社会的自立」を掲げ、(a)週5日、毎日6時間の高校生活、(b)多様な人とのコミュニケーション力、(c)基礎学力、実社会で求められる基礎的能力を確実に身につけることを目指している。

臨床心理士 週に1日勤務している。入学、転入学、編入学した生徒全員にWISC-IV（17歳以上はWAIS-III）を実施して生徒、保護者にフィードバックを行う。教職員と連携して生徒や保護者の面接などを実施する。

保護者会 月に1回開催している。学校行事の報告や予定について説明し、個別登校記録の配布、事務連



学びリンク株式会社(2015)を参考に作成

Figure 1 サポート校の仕組み

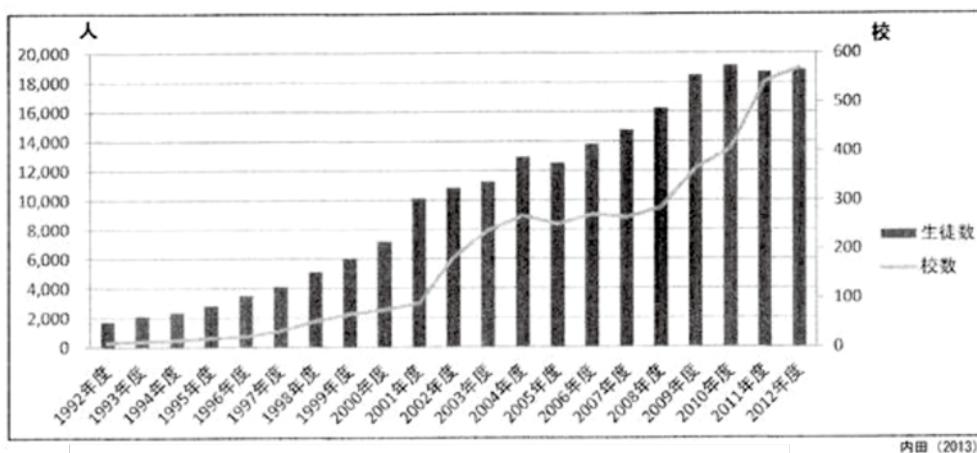


Figure 2 サポート校の校数及び生徒数の推計値とその推移

絡、学年別懇談会などを実施している。

通学方法 電車、自転車、徒歩（約15～60分）となっている。

入学前の不登校経験 約70%となっている。

学校文化 遠藤（2002）において記述されている項目を参考に調査対象校の状況を以下に述べる。単位制、2学期制となっており、授業は、学年別に個別指導と一斉授業を組合せて実施している。1時限50分、1日6時限、2/3以上の出席及び試験で単位認定をする。各学年に担任がいて個人別にきめ細やかな生徒指導をしている。施設・設備は、教室（兼 コンピュータ室）、ホワイトボード、エアコン、職員室（兼 校長室、事務室）、相談室があり、教卓、進路指導室、保健室、図書室、体育館、グラウンド、音楽室、食堂などはない。このため体育館、グラウンドは近隣施設を活用している。学校行事・活動は、入学式、卒業式、SHR、修学旅行、毎日の清掃、日直、文化祭、部活動、球技大会、臨海学校、生徒会活動などがあり、原則として学校行事は全員参加である。学校のシンボルとされる、校章、校歌、校則、生徒手帳、学校指定の運動着・上履き・カバンなどはない。ただし制服（通常は服装自由）はあり、入学式、卒業式等においては制服着用を義務付けている。また、社会的自立を目指していることからアルバイトは積極的に奨励している。

調査手続き

説明及び許可 平成28年4月25日に施設責任者へ調査研究についての説明をして許可を得た。また、平成28年5月7日の保護者会において高校3年生保護者に調査研究について説明して了承を得た。当日欠席をした保護者には説明資料を送付した。また、高校3年生全員を対象とした予備面接実施前に、生徒に対しても調査研究について説明をしている。なお、本研究は東京成徳大学大学院研究倫理審査委員会の了承を得ている。

半構造化面接 平成28年6月20日～7月4日に高

校3年生全員（男子11名、女子10名 ※在籍29名）を対象に予備面接（20分/人程度）を実施した。予備面接に先立ち、生徒一人一人について高校1・2年生時の月別登校率の遷移をグラフ化するとともに、各生徒の面接時に必要な配慮について施設責任者と打合せをした。予備面接実施後の7月7日に施設責任者と半構造化面接の調査対象者について、以下の基準で検討・調整した。

1. 中学生時代に不登校を経験し自認している。
2. 現在は登校及び精神面が安定している（担任による認定）。
3. 本人、保護者の研究協力への同意がある。

こうして抽出した生徒9名（男子4名、女子5名）を半構造化面接の調査対象者とした。調査対象者9名は、小学校から不登校であった者2名、中学校から不登校であった者7名（うち4名が相談室登校）であった（Table 1）。

平成28年7月11日～26日に、入学前後から現在までの心理的変容過程の聞きとりのための半構造化面接（40分/人程度）を実施した。面接の際には、最初にインタビューへの協力は任意であること、途中で中止を求めることができること、そうした要求によって不利益を被ることはないこと、得られたデータは厳重に管理され研究発表後には破棄されること、研究結果発表の際には匿名性が保たれることなどについて説明をして、同意書に署名してもらった。インタビューはICレコーダーに録音した。半構造化面接の主な質問項目は、以下のとおりである。

1. 入学してみてどのように感じましたか。
 2. 入学前後の気持ちの変化と理由を教えてください。
 3. 学校に通えるようになった理由について教えてください。
 4. こうなるともっと良いということはありますか。
- なお、不登校経験のある高校生を対象とすることから、半構造化面接を行う前に、倫理面の考慮や言葉遣

Table 1 調査対象者の入学前の登校状況

対象者	入学前の不登校状況
A	中学1年から教室に行けなくなり相談室登校。中学3年から時々教室に行く。
B	中学1年から不登校。
C	小学校から不登校。
D	中学3年から不登校。
E	中学1年から不登校。中学2年から相談室登校となり、時々教室へ行く。
F	中学1年から不登校。
G	中学1年から教室に行けなくなり相談室登校となり、時々教室に行く。
H	小学校から不登校。
I	中学1年から不登校。2年生から相談室登校となり、時々教室に行く。

Table 2 データ分析の手続き

STEP	分 析	手 続 き
1	インタビューデータの概念化	インタビューデータから抽象的な概念を生成する。
2	カテゴリーへの統合	概念からカテゴリーへと統合し、さらに上位カテゴリーへと統合する。
3	カテゴリー間の関係	カテゴリー間の関係を検討して関係図を作成する。

いなどについて確認するため、大学院生3名を対象に模擬面接を実施した。その結果を踏まえて、質問の表現や年齢に合わせた言葉遣いなどの見直しを行った。

データの分析法 半構造化面接において得られたインタビューデータ（テキストデータ）を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach以下、M-GTAと略）によって分析をした。M-GTAを採用したのは、この分析法がヒューマンサービス領域におけるプロセス性を持つ人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用にかかわる研究に適していることによる（木下，2003，2007）。

データ分析の手続き 分析は、M-GTAの分析手順（木下，2003，2007）に則って行った（Table 2）。手続きのSTEP 1では、インタビューデータから分析の最小単位である概念を生成した。STEP 2では生成した個々の概念の関係からカテゴリーへと統合し、さらに上位カテゴリーに統合した。STEP 3では、上位カテゴリー間の関係を統合し関係図を作成した。

調査研究者 M-GTAによる分析においては、「研究する人間」の視点が重要となる。そこで、調査研究者と調査対象校及び調査対象者との関係について概略を述べる。調査研究者は、大学院修士課程の外部実習の一環として当調査対象校に約1年間、週1回継続的に通い、ソーシャルスキルトレーニング（SST）授業を中心に一部生徒との面接などを行った。調査対象者である高校3年生とは、この調査研究のための面接以外では個別の接点はなく授業も行っていない。授業の前後は職員室で資料作成などを行っており、教職員の生徒に対する指導の様子などを観察できる状態であった。

研究過程と結果

インタビューデータの概念化（STEP 1）

インタビューデータから分析ワークシートを作成して概念生成を行った。生成された23個の概念とデータの例をTable 3に記す。

カテゴリーへの統合（STEP 2）

STEP 1で得られた分析結果を踏まえて、23個の概念を12個のカテゴリーへと統合した。さらに、統合したカテゴリーを8個の上位カテゴリーに統合した。これらの統合の結果をTable 4に記し、上位カテゴリー

について以下に説明する。

主体的な入学の意思決定 “自分に合っていると感じて自ら決めた入学”というカテゴリーを単独で“主体的な入学の意思決定”という上位カテゴリーとした。

安心できる居場所 “普通の学校とは違う落ち着ける場所”と“家庭等の安心できる居場所”というカテゴリーをまとめて“安心できる居場所”という上位カテゴリーとした。

理解してくれない家族 “理解してくれない家族”というカテゴリーを単独で上位カテゴリーとした。

登校意欲を維持するもの “親しく安心して話ができる人の存在”と“困っている生徒をみんなで助け合う仕組み”と“お金が気持ちを動かす”という3つのカテゴリーをまとめて“登校意欲を維持するもの”という上位カテゴリーとした。

思いどおりにならない心と身体 “思いどおりにならない心と身体”というカテゴリーを単独で上位カテゴリーとした。

自分は普通だという感覚 “自分は普通だという感覚”というカテゴリーを単独で上位カテゴリーとした。

先生のサポートを受けながら悩みや困難に向き合う “先生のサポートを受けながら悩みや困難に向き合う”というカテゴリーを単独で上位カテゴリーとした。

自立へ向けて成長する “人として成長する”と“目標を持って行動する”というカテゴリーをまとめて“自立に向けて成長する”という上位カテゴリーとした。

カテゴリー間の関係（STEP 3）

STEP 3では、STEP 2で生成されたインタビューデータの各カテゴリー間の関係を関係図（Figure 3）として表した。

ここで生徒の登校安定までの心理的変容過程に焦点を当て、上位カテゴリーを中心に、関係図のカテゴリー間の関係を検討する。

上段の左から右への流れの中で登校が安定していく。サポート校において登校が安定していくには、まず入学段階で“主体的な入学の意思決定”が必要である。入学後も登校が一直線に安定するわけではなく、時として不安定となる。不安定時には“思いどおりにならない心と身体”を持て余し、“理解してくれない家族”に翻弄されることもある。登校が安定し定着してくるにつれて“自分は普通だという感覚”を持つようになり、それが自己肯定感にもつながる。その自己

Table 3 インタビューデータの概念化とデータの例 (STEP 1)

No.	概念名 (事例/人)	定 義	バリエーション (代表例)
1	自分に合っていると感じて自ら決めた入学 (29/9)	パンフレットなどの情報などから、様々な理由で(消去法を含む)自分に合っていると感じ自ら入学を決めた(受容した)という自覚がある。	学校の雰囲気とかが、自分に合ってるなって思ったんで、それでここに入ろうって決めたのがきっかけです。
2	声をかけてくれた優しい先輩との交流 (6/3)	声をかけてくれた優しく話しやすい先輩との交流が入学してすぐに始まる。	(何かきっかけがあるのかな)先輩の方から言ってきて仲良くなったっていう感じです。
3	学校に行くのが楽しくなる友達存在 (9/6)	同じような経験をしている生徒が多く、自然にお互いの気持ちに配慮をすることで友達ができ、その存在が登校意欲につながっている。	学校行きたくないなって思っても話す子がいたりとかするんで、それが一番大きかったですかね。
4	登校意欲に影響する彼女(彼)の存在 (2/1)	彼女(彼)の存在によって登校意欲が左右される。	(学校に来る一つのモチベーションとして彼女の存在って大きいのかな)大きいですね。
5	困っている生徒をみんなで助け合う仕組み (4/3)	同じような経験をしている生徒たちが互いに気遣いながら助け合う仕組みがあり、教職員がそれを支え育むようにサポートしている。	友達の影響かな。ほとんど毎日のように連絡きてたし。うん。なんか、朝、自分がいなかったら、電話きて、今日来るのみたいな連絡が入ってたりもあつたんで、それもあって、行ってたんだと思います。
6	学校って感じるじゃない落ち着いた場所 (8/6)	普通の学校のイメージとは違う建物、人数、生徒の様子、先生と生徒の距離感などから落ち着いた場所と感じている。	先生との距離が近いのが一番いいかなと思って。で、なんか、普通の学校とか高校だとすごく広くて人数がいっぱいいるので、それよりもちょっと少ない方が。
7	特別に変わることなく普通に登校しているという感覚 (8/5)	自分では入学の前と後、不登校状態の前と後で特別に変わったという意識もなく、登校安定の理由も特になく、登校安定した状態を特に意識することなく学校生活をしている。	(もともと行きたいと思いながら休んでたから。あつ今日行ける。このまま行けるっていう感じで行き始めて、そのまま来ちゃったみたいな感じ。)うん。2年生の後期でも遅刻で行ったりとかはしてたから。そこはあんまり大きく変わってない気がします。
8	人とのコミュニケーションをとおして人間的に成長する (12/5)	学校行事等に取組むことが人とのコミュニケーション経験となり、その経験をとおして人間的に成長をしていく。	(友達ができるきっかけっていうのも何かあるのかな)行事が多いのでできたのかなあって、思います。何か委員会とか文化祭とかで、何かと自分で話をしなきゃいけない場面がすごくいっぱいあって。
9	進路を決めることでやるべきことが見えてくる (16/5)	進路を考えること、進路を決めることによって、将来に対する期待や不安、悩みとともにやるべきことが見えてくる。	(入る前と実際に入ってからで、気持ちの変化みたいなってありました)2年の何か後期の頃から、その動物と触れる仕事があったっていうのが決まって、はい、それが一番変わったと思います。
10	高校を卒業したいという気持ち (6/4)	3年間で普通に卒業したいということにこだわる気持ち。そのために補習や単位取得などに取り組む。	高校入ったんだったら卒業しておいた方がいいのかなって。
11	先生にはつかず離れずいて欲しい (5/4)	先生のかかわり方に対する生徒の期待というのは、状況に応じて変化する。	行事で生徒たちに任せっきりだったり、問題が起きたりするんですね。もう少し先生がたに手助けしていただきたいなと思ったりしました。
12	先生のサポートを受けながら悩みや困難に向き合う (7/4)	悩んだ時や困ったときに、先生が面談してくれたり、配慮をしてくれたりすることで悩みや困難に向き合うことができる。	こないだ進路の、なんかあつたんですね。進路面談。(この学校でね)あって、N先生に「本当にITだけでいいのか」って質問されて。それでどうしようかなっていうことで、ほかの道考え始めていて。
13	与えられた役割を自ら担うという責任感 (8/3)	学年が上がると、先輩として後輩を指導したり、生徒会役員として全体を取りまとめるということを自分たちでやらなければならないという責任感	学年が上がって一つ下に後輩が入るっていうのもあつたんで、その気持ちの面的にも、もう1回入れなおして、で、それでも1回春は朝から来てたんだと思います。
14	不登校でも変わることなく接してくれる家族 (4/4)	不登校という現象に振り回されることなく、変わりなく生徒の存在を受け止め、適切に対応してくれる家族	(あとこの学校に入る前、入ってから、で、家族との関係とかで何か変化とかある)変わらないです、何にも家族とは。
15	家庭と学校以外の安心できる居場所 (1/1)	家庭と学校以外の安心できる居場所。学校に行けなくてもいられる場所。	(そういう休んでたときっていうのも行けてたりはするの、そっちは)そっちは何か行ってました。
16	理解してくれない家族 (8/4)	不登校を認めてもらえず家族に責められたり、さまざまな事情が揃っていなかったり、兄弟がいなかったり、家族間の不和があったり、家族が自分のことを理解してくれない状態。	入学した後に、行ってたのに行かなくなつたっていう時期があつた時は、ほんとに家族全員が不機嫌で、ほんとに家の中に居たくない状態で、で、また行き始めたら嫌味が良くなってっていうのが繰り返してあつたんで。
17	勉強をする場所としての学校 (6/3)	学校に対して勉強をきちんと教えてくれる場所というイメージを持っている。	なんか、ただ、その時は、なんかここなら毎日通えるかなみたいな。ここなら、ちゃんと勉強もして、ちゃんと進路とかも進めるかなみたいな感じで。
18	権威に対する論理的な批判的評価 (13/5)	単なる好き嫌いではなく、しっかりと理由も述べ、時には改善案も示して、学校や先生に対して批判的な評価をしている。	怒るんだったら、生徒が来る前か生徒が帰った後とか、体育に行っていない状態のところで、その他の先生たちに注意とかしてもらえたらいいな。怒鳴り声とか聞くのがちょっと)苦手な子もいるので。
19	思いどおりにならない心と身体 (3/2)	自分の意志や気持ちとは関係なく昼夜逆転が起きてしまったり、朝起きることができなかったり、自分でも思うようにできない体調。登校する気持ちがあつても学校に行きたくない気持ちをどうすることもできずにいる心。	冬は、なんか、いろんな変化が一気に起こりすぎて、それに自分の体が追いつけなくなつちゃって、遅刻とか休みとかっていうのが続いたりしたかな。
20	気にかかる学費の負担 (6/3)	通常の学校よりも学費が高いことを気にかけている。	自分で決めた学校だから、まあ公立行ったら安いけど、ここは高いっていうお金を払ってもらってるから、ちゃんと行かないと。
21	報酬が登校につながる (1/1)	目先の欲で登校するようになる。	今の小遣いにプラス5,000円で10,000円にしてくれたら行くからとか、相談したらいいんじゃないかみたいな話があつて。それで親にお願いして、そこから週4、5とかで行きましました。
22	今は特に問題なく普通だ (3/2)	今は普通、一人でいても問題ないし、ほかに特に問題も抱えていない。	まあ学校に通うのは普通のことと、自分が中学の時してたことが異常だったと思って。お金払ってるのに休むっていうのは親にも申し訳ない。
23	同じような経験をしている生徒ばかりなので居やすい (2/2)	学校にいる生徒が同じような経験をしている人ばかりなので安心して居られる。暗黙のうちにお互いに気を使いあうということが行われている。	(他はね、実際に入って来てみてどんな感じでした)周りにあのいろいろ事情抱えて学校に行けなかった子達もいて居やすかったです。

通信制高等学校サポート校における登校安定までの心理的変容過程

Table 4 生成されたインタビューデータの 카테고리 (STEP 2)

上位カテゴリー		カテゴリー		概念名	
A	主体的な入学の意思決定	I	自分に合っていると感じて自ら決めた入学	1	自分に合っていると感じて自ら決めた入学
B	安心できる居場所	II	普通の学校とは違う落ち着ける場所	6	学校っていう感じじゃない落ち着ける場所
				23	同じような経験をしている生徒ばかりなので居やすい
		III	家庭等の安心できる居場所	14	不登校でも変わることなく接してくれる家族
				15	家庭と学校以外の安心できる居場所
C	理解してくれない家族	IV	理解してくれない家族	16	理解してくれない家族
D	登校意欲を維持するもの	V	親しく安心して話ができる人の存在	2	声をかけてくれた優しい先輩との交流
				3	学校に行くのが楽しくなる友達の存在
				4	登校意欲に影響する彼女(彼)の存在
		VI	困っている生徒をみんなで助け合う仕組み	5	困っている生徒をみんなで助け合う仕組み
		VII	お金が気持ちを動かす	21	報酬が登校につながる
				20	気にかかる学費の負担
E	思いどおりにならない心と身体	VIII	思いどおりにならない心と身体	19	思いどおりにならない心と身体
F	自分は普通だという感覚	IX	自分は普通だという感覚	7	特別に変わることなく普通に登校しているという感覚
				22	今は特に問題なく普通だ
G	先生のサポートを受けながら悩みや困難に向き合う	X	先生のサポートを受けながら悩みや困難に向き合う	11	先生にはつかず離れずいて欲しい
				12	先生のサポートを受けながら悩みや困難に向き合う
H	自立へ向けて成長する	XI	人として成長する	8	人とのコミュニケーションをとおして人間的に成長する
				13	与えられた役割を自ら担うという責任感
				18	権威に対する論理的な批判的評価
		XII	目標を持って行動する	9	進路を決めることでやるべきことが見えてくる
				10	高校を卒業したいという気持ち
				17	勉強をする場所としての学校

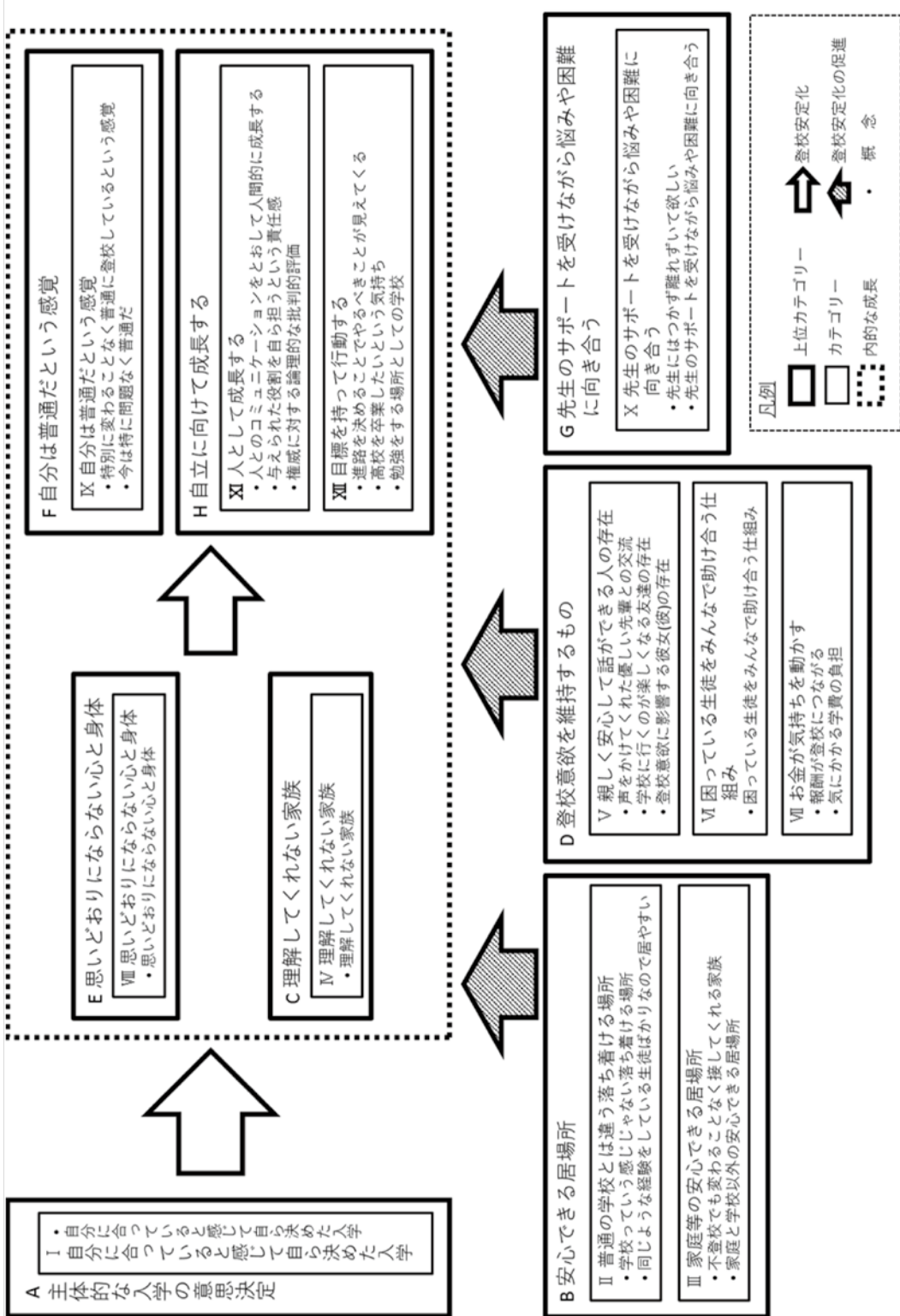


Figure 3 通信制高等学校サポート校における登校安定までの心理的変容過程

肯定感が素地となり、サポート校という環境の中で、人とのコミュニケーションや与えられた役割を担うことなどをとおして“人として成長”し、“目標を持って行動する”ことにつながり、大きく“自立に向けて成長する”ようになる。

下段は、生徒の成長をともなう登校安定の過程を支えるものである。一つ目は、学校（サポート校）や家庭などの“安心できる居場所”である。二つ目は、学校（サポート校）の中の“親しく安心して話ができる人の存在”や“困っている生徒をみんなで助け合う仕組み”などの“登校意欲を維持するもの”である。三つ目は、“先生のサポートを受けながら悩みや困難に向き合う”ことである。これらの三つがすべてそろっていなければ登校が安定しないというわけではないが、サポート校という環境は、これらの三つの要件をバランスよく提供してくれる場であると言える。

考 察

本研究で見いだされた結果をもとに、通信制高等学校サポート校における登校安定までの心理的変容過程と何が登校を安定させているのかについて生徒自身の視点から考察するとともに、保護者の視点と学校教職員の視点からも考察を加える。

生徒自身の視点から

生徒の内的な成長による登校安定 登校が安定することで、自分は普通だという感覚、すなわち自尊感情や自己肯定感が高まってくる。また、思春期・青年期に特有の自立に向けての人間的な成長が見られるようになる。これは、生徒個々の成長であるとともに、生徒間のコミュニケーションや組織的に与えられた役割、権威への対峙などとの相互作用によって促進されるものでもある。中学生から高校生という時期は、エリクソンによる発達段階では学童期と青年期にあたり、この生徒の心理的な変化は、エリクソンのいう青年期の発達課題である自己同一性（アイデンティティ）の確立にあたる（羽岡・笹原・松崎，2009）。不登校という現象は、それ以前の発達過程でのつまずきに対する自然な防衛反応として捉えることもできるだろう（甲斐，1985）。すなわちサポート校における登校安定までの心理的変容過程とは、自己同一性（アイデンティティ）拡散の危機から脱し、その確立をする発達過程であるということが言えるだろう。

また、サポート校において登校が安定するには、入学時点で生徒本人がたとえ消極的であろうとも自ら入学を決定していることが大きなポイントとなるのが本研究の結果から示唆された。自らの入学決定がなければ登校が安定しないとは言い切れないが、自分の学校として受け入れなければ登校しようという気持ちにならないということは言えるだろう。

生徒の内的な成長を支える3つの要素 生徒の人間的な成長による登校安定へのプロセスを支えているのが、安心できる居場所であり、登校意欲を維持するものであり、先生のサポートである。

1. 安心できる居場所とは、則定（2008）のいう心理的居場所のことであろう。則定（2008）は、心理的居場所を「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」と定義し、青年期の心理的居場所感を構成する4概念「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」について調査している。その結果、親友に対しては「安心感」「本来感」が高く、両親に対しては「安心感」「被受容感」が高いということを明らかにしている。

本研究においては、安心できる居場所として、普通の学校とは違う落ち着ける場所としてのサポート校と、不登校でも変わることなく接してくれる家族のいる家庭について語られている。サポート校では、同じような経験をしている生徒ばかりが集まっており、それが「安心感」「本来感」をより強く感じさせているのではないだろうか。また、不登校の生徒を理解できなかった家族が、サポート校において教職員からの情報提供を得ることや、ほかの不登校生徒の保護者との会話によって、不登校の生徒を理解し、そのまま受け入れることができるようになる。このように不登校の生徒に対する家族の理解が進むことで、生徒が家族に対する「安心感」「被受容感」を強く感じ、家庭が安心できる居場所となるのだろう。そのほか、生徒によっては、趣味の場などが安心できる居場所となっていることを語っている。

2. 登校意欲を維持するものとして、対人関係によるつながりが重要であるということが、本研究の結果から示唆された。伊藤（2009）は、不登校経験者を積極的に受け入れながら登校継続による単位取得が卒業要件となる学校（チャレンジスクール、高等専修学校）を対象に、不登校経験をもつ生徒たちの登校継続の理由とそれを支える学校側の実践について、森田（1991）の不登校生成モデルを参照しながら分析を行っている。その結果、登校継続には対人関係によるつながりの変化が大きな意味をもつこと、また、対人関係によるつながりを強固なものとするために教職員の直接的・間接的サポートや「痛み」を共有する生徒集団が重要な役割を果たすことを明らかにしている。

本研究においては、登校意欲を維持するものとして、サポート校の先輩、友達（同級生）、親密な異性の存在や、生徒同士で助け合うサポート校の仕組み、学費という形に象徴される保護者の愛情について語られている。先輩や友達（同級生）などとの関係づくりや、困っている生徒を助け合う仕組みづくりについては、教職員が間接的にサポートしている。具体的には、学校行事などを生徒主体の運営としており、学年を越えたつ

ながりができるようにしている。また、生徒間のトラブルや登校が安定しない生徒へのサポートなどの多くも教職員が生徒に働きかけて生徒たち自身で解決するように指導をしている。そのため、親しく安心して話ができる人の存在の中に教職員が直接は入ってこないのだろうと考えられる。

3. 生徒たちが先生に望んでいるサポートは、本研究の結果から、何でもやって欲しいなどという依存的なものではなく、適度な距離を保った状態での見守りであるということが示唆された。実際、調査対象校では教職員による直接的なサポートは行わず、生徒たちが自らの力で課題を解決するように環境を整えている。そのため、生徒たちに守られ保護されているという強い意識はない。適度な距離を保った先生のサポートによって、自立に向けた成長が促進されていると考えられる。

これら3つの登校安定と人間的な成長へのプロセスを支えるものは、それぞれが独立しているものではなく、時として相乗的に、時として相補的に機能しているものと考えられる。それは、保護者と教職員が保護者会や学校行事、個別面談などで連携することだったり、保護者が不登校生徒の保護者としてサポート校という安心できる居場所を得ることだったりする。そして、保護者も登校の安定しない生徒に対する理解を深めていくのである。

保護者の視点から

次に保護者の視点から、サポート校において登校を安定させるにはどうしたら良いのかということを考えてみる。まずは、入学時点で生徒本人がたとえ消極的であろうとも自ら入学を決定していることが大きなポイントとなる。単に入学させれば良いというものではない。しかし、消極的な入学決定であっても登校が安定していることを考えると、入学後にサポート校に入学したことを受容するというだけでも登校が安定する可能性はあるのかもしれない。

登校が安定しないときには、生徒から“理解してくれない家族”ということが語られることが多いが、これはあくまでも生徒から見た家族の姿である。家族は不登校の生徒のことを“理解して”サポート校に入学させているのだが、生徒からは“理解してくれない”と見られていることもある。そもそも“理解”とは何かであるが、不登校時には生徒本人も“思いどおりにならない心と身体”を持って余していることが多く、本人も自分の不登校を必ずしも“理解”していないのである。したがって、家族に対して求めている“理解”とは、不登校である生徒のことをそのまま受け入れることを求めているのではないだろうか。

登校が安定するにつれて、自分は普通だという感覚、すなわち自尊感情が高まり、自立に向けての成長が見

られるようになる。この心理的変容過程は、この不登校というつまづきから生徒自らが立ち上がり自己同一性（アイデンティティ）を獲得することであると言える。つまり、不登校から登校安定へのプロセスの本質は、生徒自身の成長にあるのである。それを、サポート校という環境が助けているということである。保護者も安心できる居場所として家庭環境を整えて暖かく見守ることが大切である。

学校教職員の視点から

次に学校教職員の視点から、サポート校において登校を安定させるにはどうしたら良いのかということを考えてみる。まずは、入学時点で生徒本人がたとえ消極的であろうとも自ら入学を決定していることが大きなポイントとなる。したがって、学校の特徴や学んでいる生徒たちのことを説明し、ここならやっていける、ここで頑張ってみようという気持ちにさせることが最初の課題となるだろう。そして教職員が前面に出た支援を生徒たちが必ずしも望んでいないことから、生徒同士の関係づくりや、ともに学校を運営するような生徒の主体性を重んじた学校運営が重要であると考えられる。

今後の課題

今回、サポート校に在籍している現役高校生の生のデータを得られたことは特筆すべきことであるが、倫理面への配慮から不登校の理由を聞くことなどはできなかった。また、調査対象者が高校生9名であることから理論的飽和に至ったとは言い難い。

本研究では、あるサポート校における登校安定までの心理的変容過程を明らかにしたが、サポート校および周辺教育施設は、さまざまな学校文化をもつものであるため、多くのサポート校で同様の研究に取り組み、学校文化の違いを踏まえた登校安定までの心理的変容過程と登校を安定させているものを明らかにすることが今後の課題であろう。また、不登校理由によって登校安定までの心理的変容過程も異なることが考えられ、今後、不登校理由別に検討することも課題であろう。

引用文献

- 遠藤 宏美 (2002). 「サポート校」における学校文化—「学校文化」なるものの特性解明の前提として— 教育学研究集録, 26, 25-35.
- 羽岡 健史・笹原 信一郎・松崎 一葉 (2009). 思春期のこころの発達 (特集 思春期) 母子保健情報, 60, 6-10.
- 東村 知子 (2004). サポート校における不登校生・高校中退者への支援—その意義と矛盾— 実験社会心理学研究, 43(2), 140-154.

- 伊藤 秀樹 (2009). 不登校経験者への登校支援とその課題—チャレンジスクール, 高等専修学校の事例から— 教育社会学研究, 84, 207-226.
- 甲斐 裕子 (1985). 登校拒否児の自己認知 情緒障害教育研究紀要, 4, 51-54.
- 木下 康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い— 弘文堂
- 木下 康仁 (2007). ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて— 弘文堂
- 学びリンク株式会社 (2015). 全国フリースクールガイド2015～2016年版—小中高・不登校生の居場所探し—
- 文部科学省 (2013). 資料2-1 定時制・通信制課程について 高等学校教育部会 (第19回) 配付資料
- 森田 洋司 (1991). 「不登校」現象の社会学 学文社
- 則定 百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, 41(1), 64-72.
- 尾場 友和 (2011). オルタナティブな進路としての通信制高校—入学者の属性と意識— 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部第60号, 55-62.
- 齋藤 香織・松岡 恵子・黒沢 幸子・森 俊夫・栗田 広 (2005). 不登校生のメンタルヘルス—通信制サポート校に在籍する不登校経験者への調査から— こころの健康, 20(1), 36-44.
- 内田 康弘 (2013). 私立通信制高校サポート校の誕生とその展開—教育政策との関連に着目して— 日本通信教育学会研究論集, 1-15.

謝 辞

本研究の趣旨をご理解いただき、快く御協力いただいたA通信制高等学校サポート校の施設責任者をはじめとする教職員の皆様、そしてインタビューに応じてくれた生徒さんと保護者の皆様に心から感謝申し上げます。

—2017. 1.30受稿, 2017. 3. 1受理—

The Processes of Psychological Change until Stable Attendance at a Correspondence High School Support School

Kohichi YAMADA (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Setsuko TAMURA (*Tokyo Seitoku University*)

The purpose of this research is to generate a model for the processes of psychological change in students who have a history of absenteeism during junior high school, up until their stable attendance at a correspondence high school support school (hereafter, support school) has been achieved. Semi-structured interviews were conducted with nine third-grade students whose attendance was currently stable. The obtained interview data were analyzed using a modified grounded theory approach and revealed students' own internal growth, shown in the "improvement of self-esteem and establishment of identity." This is supported by the following three elements: (1) a safe place such as school or home, (2) connections with friends to maintain motivation to attend school, and (3) support by a teacher closely following students.

Key words: Absenteeism, correspondence high school, support school, stable school attendance, M-GTA

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2017, Vol. 17, pp. 78-87